

第2節 国語

1. 出題のねらい

1. 問題作成の方針

- (1) 現行の学習指導要領第1学年の目標が達成されているかどうかを測定する視点から問題を作成する。
- (2) 国語科の指導内容「表現」および「理解」の2領域と「言語事項」のそれぞれの下位項目（「表現」のア～コ、「理解」のア～ク、「言語事項」の(1)ア～カ）については、なるべく網羅していくようにする。また、今後実施するテストによって経年比較することを考慮して新学習指導要領にも十分配慮する。
- (3) 指導内容の実現状況については、「国語への関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」「言語についての知識・理解・技能」の4観点からとらえ、できるだけすべての観点をおさえられるようにする。ただし、ペーパーテストとして「関心・意欲・態度」のように問題に盛り込みにくいものについては、「学習に関する意識・実態調査」で把握できるようにする。
- (4) 問題は説明的文章と文学的文章から1題ずつ出し、2領域の指導事項と観点から作問する（古典は出題しない）。
- (5) 漢字の読み書きについては、小学校で学習した1,006字に加えて、その他の常用漢字900字程度の中から各教科書を検討し、適切なものを出题する。
- (6) 音声言語の出题については、今後重視されていく「伝え合う力」の実態をみると、情報収集の力を確かめるという2点から配慮して作問する。吹き込みは、専門のアナウンサーおよび中学生による臨場感の

あるテープに仕上げる。

- (7) テストは1単位時間50分で終了できる内容とする。
- (8) 意欲、思考力、判断力、表現力などの新しい学力観に基づく学力の判定については、段階を決めて採点しやすいように「採点基準」を定め、採点は記号化しコンピュータ処理が可能な配慮をする。

2. 問題作成の経過

(1) 問題作成当初

調査を実施する一番基礎になる学力観について検討した。

現在、学力低下論とともに、学力について多々論議されているが、国語においては、従来の言語3要素（文字表記・語彙語句・文法）が基礎で、それを運用する力を基本とする考え方から、いま重要視されている学ぼうとする力（関心・意欲・態度）や学ばう力（思考力・認識力・判断力・問題発見力など）を大切にしていくことを確認した。

具体的には、現行および新学習指導要領に示された内容を「学力」とおさえることとした。

また、ペーパーテストでは測定しにくいとされていた自ら学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力などの資質や能力をも把握できる問題を含むテストの作成を心がけた。

(2) 問題作成の過程

学力を測る観点および内容項目の設定は、現行の学習指導要領に定める内容および指導要録の観点別学習状況評価の観点をもとにしていくが、経年比較をしていくために、

新学習指導要領で移行・削減される範囲について作成することもありうることを確認した。また、できるだけ多面的に学力をとらえるために、限られた条件の中で問いの工夫をすることとした。

[音声言語]

ディベートを意識した問題であり、情報の聞き取りだけでなく話し合いのプロセスで自分自身の考えを持つところまで要求した出題になっている。音声を流すことは一度だけという設定にしたかったのだが、日常的にも放送での連絡などは2回が慣例となっているということで2回流すこととした。話し合いの話題は、流行語大賞となった言葉やら抜き言葉などの身近な内容で関心をそそる内容に組み立てた。

「①要点を聞き取る力」「②聞き取りから自分の考えをまとめる力」「③課題に正対する表現力」を中心に、理解、表現、また思考力や判断力をみていくことをねらいとした。

[説明的文章]

論理的な文章が展開されているもの、およびグラフ等から情報を読み取ることができるものを意図した。

要旨をとらえ、グラフの情報との関連性を整理して、自分自身がどういう情報を発することができるかという現代的な能力を

主としてねらっている。文章は少々長めであるが、内容は環境を扱った取り組みやすいもので、段落等もつかみやすい文章である。

「①段落相互の関係を読み取る力」「②接続語や指示語の理解」「③筆者のものの見方・考え方を知るとともに、自分の考えを持つ力」「④図表を読む力」「⑤自分の考えを適切に表現する力」を主としてみられるようにした。

[文学的文章]

情景の想像や心情を読み取ったりするのに適した教材を意図した。

「①文脈を読み取り、展開をつかむ力」「②登場人物の心情を読み取る力」「③慣用句などの理解」「④擬態語などの語句の味わい」など、文学的な文章によく用いられる独特の表現や文体の特徴などにも注意して読み進む力が問いの鍵にもなっている。

[言語事項]

漢字の読み・書きについては、採点処理上、選択肢法で行った。ことわざについては、日常的に使われるものを意識して出題してある。

(藤森喜子 ベネッセ教育研究所顧問)

「出題の方針」は、P.67を参照。

2 . 通過率・得点分布

1 . 通過率

表2 - 2 - 1には、設問別の通過率および正解率、準正解率をまとめた。あわせて、設

問の領域と出題内容を示してある。まず、領域ごとの通過率の傾向を見てみると、【音声言語】と【説明的文章】領域は、ほぼ一定の通過率（90％台および60％台）を示している。他方、【文学的文章】や【言語事項】領域は、

表2 - 2 - 1 国語の設問別通過率

(%)

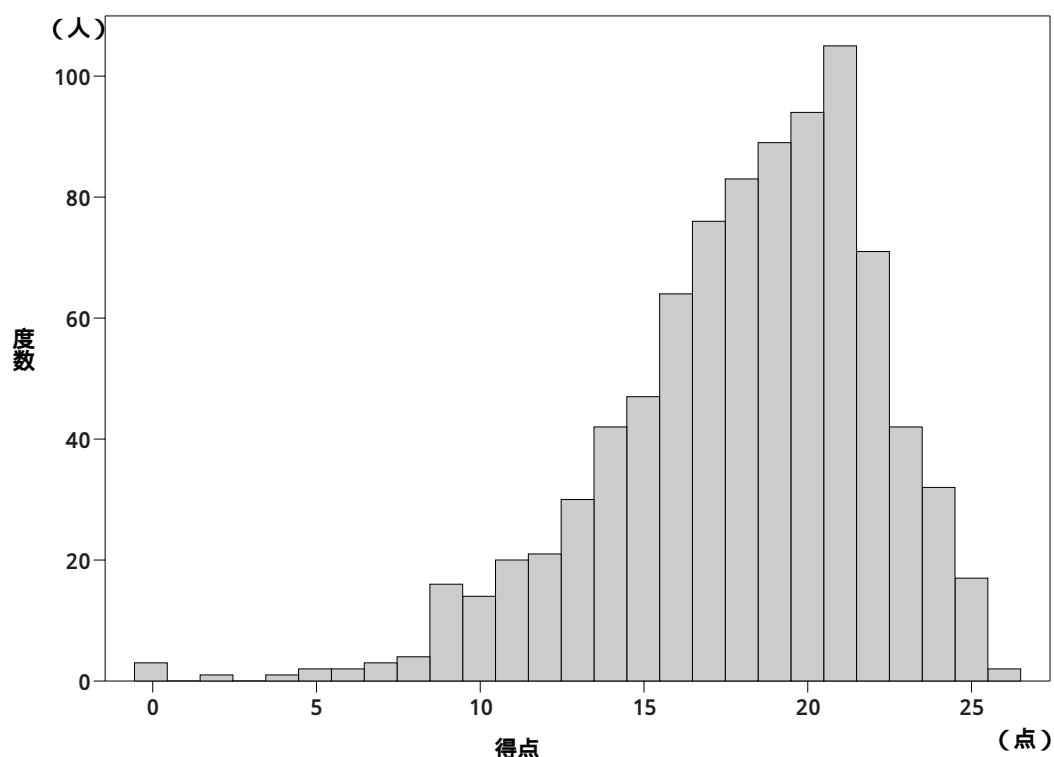
大問 - 小問	領 域	内 容	通過率	正解率	準正解率	
①	(1)	音声言語	話し手の立場の理解	93.3	93.3	—
	(2)		話し手の主張と根拠の理解	96.3	96.3	—
	(3)		主張の聞き取り	97.0	97.0	—
	(4)		自分の意見の整理と表現	78.1	47.7	30.4
②	(1)	説明的文章	グラフによる情報の理解	48.9	48.9	—
	(2) ①		文章の構成と要点の理解	92.5	81.3	11.2
	(2) ②		文章の構成と要点の理解	71.9	64.2	7.7
	(2) ③		文章の構成と要点の理解	64.7	30.9	33.8
	(3)		指示語の理解	64.0	64.0	—
	(4)		筆者のものの見方・考え方の理解と表現	68.0	22.7	45.3
	(5) ①		グラフによる情報の理解と選択肢の読み取り	62.3	62.3	—
	(5) ②		グラフによる情報の理解と選択肢の読み取り	68.9	68.9	—
③	(1)	文学的文章	慣用句の意味	80.2	80.2	—
	(2)		文脈の読み取り	64.1	64.1	—
	(3)		語句の用法	83.1	83.1	—
	(4)		慣用句の意味	59.3	59.3	—
	(5)		心情の読み取り	72.3	72.3	—
	(6)		心情の読み取りと表現	30.8	30.8	—
④	(1) ①	言語事項	漢字の読み	70.6	70.6	—
	(1) ②		漢字の読み	64.1	64.1	—
	(1) ③		漢字の読み	95.6	95.6	—
	(2) ①		熟語の意味	34.8	34.8	—
	(2) ②		熟語の意味	23.0	23.0	—
	(3) ①		ことわざの用法	56.0	56.0	—
	(3) ②		ことわざの用法	89.3	89.3	—
	(3) ③		ことわざの用法	73.2	73.2	—

通過率にばらつきがあり、特に、【言語事項】の通過率の差は、72.6ポイントとなっている。解答方法に着目してみると、表2-2-1で準正解を設定した設問は、すべて記述式である。しかも、単に文中から抜き出すのではなく、ある程度自分の言葉で整理し表現しなくてはならない問いとなっている。準正解を設定したいくつかの設問では、正解率と準正解率の差の大きさが明らかである。

2. 得点分布

図2-2-1は、国語の得点分布を示したものである。いずれの問題も、通過した場合を1点として生徒個人の得点を算出した。これをみると、国語は、山型ではあるが、右に偏った分布となっている。平均点は18.0点(26点満点)、標準偏差は4.08であった。

図2-2-1 国語の得点分布



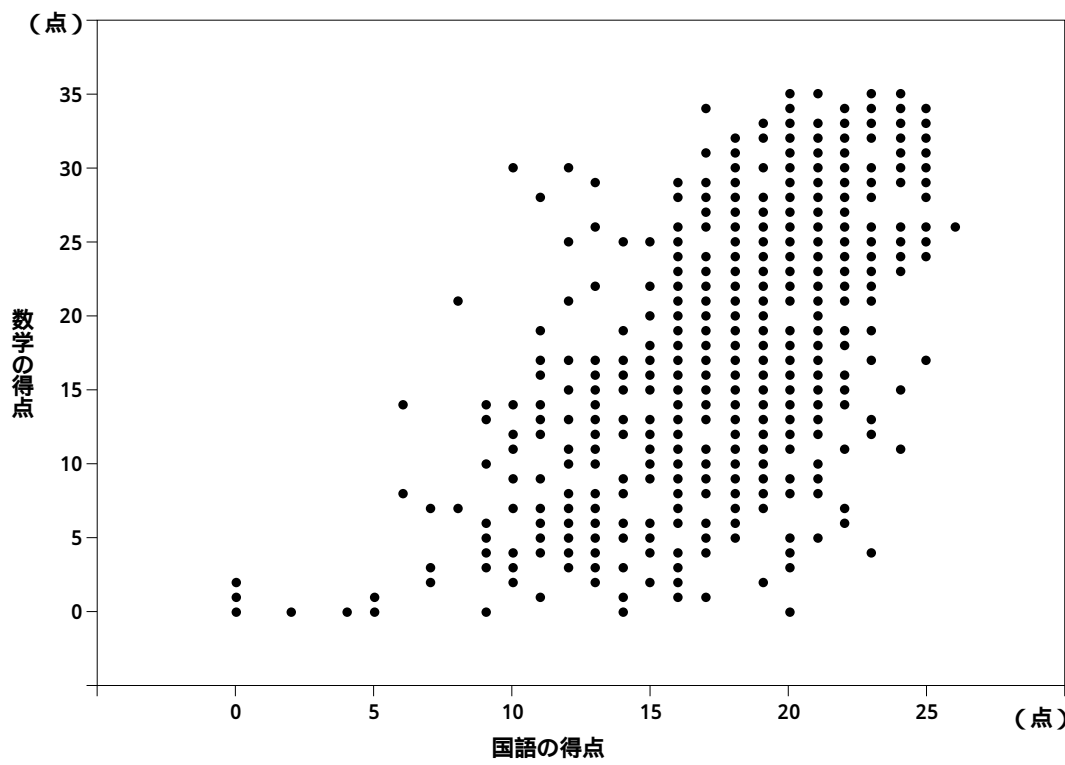
3 . 数学と国語の相関

数学と国語の得点分布は、大きく異なっていた。そこで、両者の関係を見るために、図2 - 2 - 2に、数学と国語の散布図を示した。

相関係数は、0.618である。双峰型を描いた数学の影響で、数学と国語の間にある程度の関連はみられるものの、リニアな関係を示してはいない。

(諸田裕子 お茶の水女子大学大学院博士課程)

図2 - 2 - 2 数学得点と国語得点の相関



資料・調査票（到達度テスト・中学2年生国語）

国語

1 放送問題（テープ音声）

（ナレーター）

これから、放送問題を始めます。調査票は閉じたままにして、テープを聞いてください。

太郎君と花子さんの話し合いの様子を二回くり返して放送します。大事だと思つてところは調査票の表紙のメモ欄にメモをとりながら聞いてください。そのあと続けて、問題を放送します。

問題は一回しか放送しないので、よく聞いて、答えを解答用紙に書いてください。

それでは、これから、太郎君と花子さんが「乱れている中学生の言葉づかい」というテーマで話し合います。

（太郎） ぼくは自分たちの言葉づかいが特別に乱れているとは思いません。確かに「オッハー」とか「チョー、うざい」といった省略語や流行語は、増えているような気がします。でも、それはいつの時代にもあつたのではないのでしょうか。

（花子） わたしは、そつた省略語や流行語もふくめて、やはりわたしたち中学生の言葉づかいは乱れてきているように感じます。たとえば、相手が目上の人のとき、その人に対して「オッハー」と声をかけるのは失礼なことです。相手がいやな気持ちになる言葉を使うこと自体、わたしたちの言葉づかいが乱れている証拠だと思つたのです。

（太郎） そうでしょうか。「オッハー」と声をかけあつたことでコミュニケーションがとれるのだと思います。前よりもつと仲良くなれるかもしれないし、とんとんそついつあいさつをした方がいいと思います。

（花子） 日本語には敬語というものがあります。やはり目上の人に対しては、きちんとした言葉づかいをすることが大切です。目上の人が「オッハー」と言われて良い気持ちであるはずがありません。

（太郎） そんなかた苦しいことを言つたよ。気楽にあいさつできればその方がいいじゃないか。目上の人にだつて喜ぶ人はいるよ。

（花子） 気楽に話すことが親しさであるというふうに考えること自体がおかしくはありませんか。

（ナレーター） もう一度二人の会話をくり返します。

――二回目省略――

（ナレーター）

今から、問題を読みます。解答用紙を準備してください。

解答用紙の1の欄に、問いの答えを書いてください。

1 中学生の言葉づかいについて、「乱れていない」と考えているのは誰ですか。解答欄のAからEの中から正しいものを一つ選び、記号を。で囲んでください。

【正解】ア 太郎 イ 花子 ウ 太郎と花子の両方 E 太郎と花子の両方とも違う

2 太郎君が「オッハー」のようなあいさつがいいと主張しているのは、どのような理由からですか。解答欄のAからEの中から正しいものを一つ選び、記号を。で囲んでください。

【正解】ア かた苦しいあいさつだから イ 相手に失礼だから

ウ より仲良くなれるから E 相手が目上の人だから

3 花子さんが目上の人に対する言葉づかいとして大切だと主張しているのは、どのような言葉ですか。解答欄のAからEの中から正しいものを一つ選び、記号を。で囲んでください。

【正解】A 省略語 ① 敬語 ウ 外来語 E 流行語

4 あなたがこの話し合いに参加し、太郎君と花子さんのあとに発言するとします。そのとき、あなただったらどのように発言しますが、あなたの意見を解答用紙に示されている条件にしたがって書いてください。

（解答用紙に示されている条件）

- ① 百字以内で書いてください。
- ② なぜそのような発言をするのかという理由がわかるように書いてください。
- ③ 書きはじめを一字あける必要はありません。「、」「や」「も」字に数えます。

【解答例】多くの中学生は、目上の人や尊敬している人には敬語を使い、年下か親しい関係の人だけに流行語を使うというように言葉を使い分けていると思います。だから、中学生の言葉づかいが特別に乱れているとは思いません。【九十九字】

【分野】音声言語

【内容】話し手の立場の理解

【分野】音声言語

【内容】話し手の主張と根拠^{しんこ}の理解

【分野】音声言語

【内容】主張の聞き取り

【分野】音声言語

【内容】自分の意見の整理と表現

【採点基準】次の四つの条件をすべて満たしているものが正解

- a. 五十字以上百字以内で書いている。
 - b. 話し合いのテーマ「中学生の言葉づかい」について書いている。
 - c. 自分が取る立場（自分の考え）を明示している。
 - d. そのように考える理由（論拠）を明示している。
- 次のいずれかの場合は、説明不足とみなし、準正解とする。
- a. 字数不足（五十字未満）、字数超過（百字より多い）。
 - b. 自分が考える理由については明示されているが、自分の取る立場が明示されていない。
 - c. 自分の取る立場は明示されているが、その論拠が理由であることが判断できる書き方で書かれていない。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしたちは、毎日の生活の中で、多くのものを消費し、捨てている。これらのごみには現代のわたしたちの生活が見事に反映されていて、恐ろしいくらいである。

家庭や学校、事務所など、日常生活の中から出るごみの量は年々増え続けている。統計によると、一九六五年には全国で一日当たり約四万五千トンであったものが、一九七五年には約八万七千トン、一九八五年には約① トンとなり、実に二十年間で二倍以上に増えている。さ

らに注目すべきは、この廃棄物の中身が、最近大きく変化してきていることである。

まず第一に言えるのは、使い捨ての容器、包装材などが増えたことである。空き缶、プラスチック・トレイ、ビニル袋などの容器、包装材は、容積で考えると、毎日わたしたちが出すごみの約六〇パーセントを占めている。普通、家庭で捨てられるものといえば、台所の調理かすとか、不要になった家庭用品が思い浮かぶが、実は、そのような中身よりも、それを入れたり包んだりするもののほうが、ずっと多いのである。

例えば、スーパーマーケットでの買い物を考えてみよう。肉や魚は一つ一つプラスチック・トレイに入れられ、ビニルでくるまれている。野菜や果物はポリエチレンの袋に入れて売られている。さらにレジ行くと、その店の名前入りの買い物袋をくれ、品物はそれに入れて持ち帰られることになる。ところが、この幾重にもわたる包装は、ひとたび家に帰り着き、中身を取り出すと、たちまち不要なものとなり、捨てられてごみとなるのである。

これらの食品包装材は、ますます増加する傾向にあるが、困るのは、その処理の問題である。ビニル、ポリエチレンなどのプラスチックは、みな石油を原料とする合成樹脂である。これらは土に埋めても腐らず、自然に還元されない。なかには燃やすと有害なガスを出すものもある。処理に困る点では、使用済み乾電池も同様である。水銀を含む乾電池は、今や我が国で年間約三十億個も生産されている。それらが、他の廃棄物といつしよに燃やされ、埋められ、水銀を環境へとばらまくことになる。廃棄物の中に、こういう処理の厄介なもの、有害なものが増えてきたのも、変化の一つである。

次に食べ残しが増えたことも気になる点である。大根のしっぽ、キャベツのしん、ジャガイモの皮、魚の頭、卵の殻などの調理かすに交じって、御飯やパンの残り、ほんの少ししか手をつけていないお菓子や果物といった食べ残しがたくさん見られる。その量は、台所から出されるごみ全体の四〇から四五パーセントにもぼる。しかも、そのうちの一〇パーセント近くは、全く手もつけず、買ったままの状態で捨てられているのである。

最後にもう一つ、粗大ごみの量と内容について触れておこう。廃棄物の集積所に行くと、粗大ごみの巨大な山が目に入る。テレビ、冷蔵庫、ソファ、時計、オートバイなど、さまざまな生活用品が、いずれもまだ十分使えそうな状態で捨てられている。日本では、あらゆるものをかき集め、ものに囲まれて暮らしながら、少し飽きるとばんばん捨てる生活があたりまえになつてしまっているように思われる。

……次ページに続く

資料 ● 調査票（到達度テスト・中学2年生国語）

現代社会では、ものを生産したり消費したりすることは大変な関心が寄せられている。しかし、それらが捨てられたときには、ほんのど関心がもたれていないと言っている。『生産物は必ずいつかはごみになる』というのを思えば、もう少し、ものを作ったり、ものを買ったりするときに、その品物の行く末を考慮すべきではないだろうか。

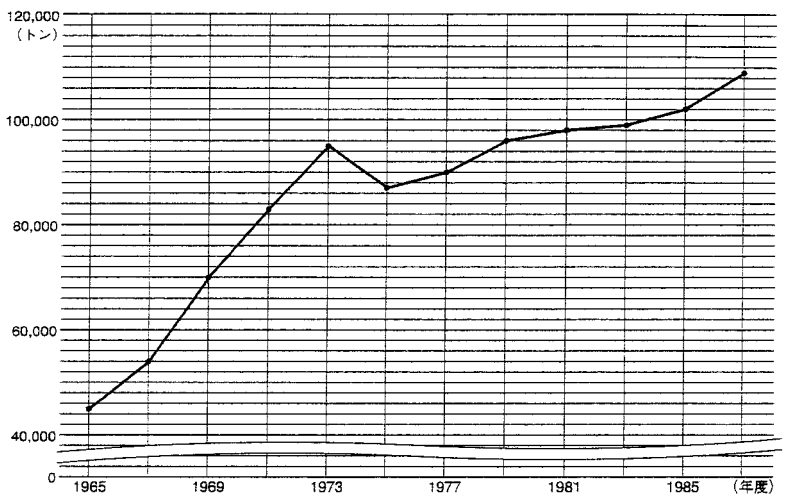
生産者の側がそれをよく考えなければならぬのはもちろんだが、消費者としてのわたしたちも、もつこの問題に関心を払う必要がある。まずで

きることは

。ものを作っ

たり、買ったり、使ったりするときに、それが自分にとって本当に必要なものかどうか、どう使うべきかを考えるようにしたい。それは、単に廃棄物を少なくするということにとまらず、自分たちの暮らしを考え、ひいては現代の使い捨て社会を足元から見直すきつかけにもなると思つのである。

（高月 純、本当に必要なものは、より）



グラフ(A)：ごみの総量の変化(一日当たり)

1 文章中の ① にあてはまる数字を、グラフ(A)から読み取って書きなさい。

【正解】 十万二千(トン)

【分野】 説明的文章

【内容】 グラフによる情報の理解

【採点基準】 縦書き、横書きについては不問。また、算用数字も可。

資料・調査票（到達度テスト・中学2年生国語）

- 2 筆者は、^②「廃棄物の中身が、最近大きく変化してきている」と述べていますが、その変化とはどのようなことですか。三つに整理して書きなさい。

【正解】（1）使い捨ての容器、包装材などが増えたこと。

（別解）処理の厄介なもの、有害なものが増えてきたこと。

（2）食べ残しが増えたこと。

（3）粗大ごみが、まだ十分使えそうな状態で捨てられていること。

- 3 文章中の「^③その」は何を指していますか。文章中からぬき出して書きなさい。

【正解】食品包装材

- 4 文章中の「^④まずできることは」の後が、で空欄になっています。この後に文を続けるとすると、どのような文が入りますか。前後の文章とのつながりを考えて、三十文字以内で書きなさい。

【解答例】自分が出すごみの量をできるだけ減らす努力をすることである【二十八字】

【分野】説明的文章

【内容】文章の構成と要点の理解

【採点基準】「廃棄物の中身」およびそれが「どのように変化」したのかについて書かれているものが正解。

（1）（3）については順不同

「使い捨ての容器」「包装材」「食べ残し」「粗大ごみ」など「廃棄物の中身」についてのみ書いているものは準正解。整理されていないが、正解の内容が含まれている解答は準正解。

【分野】説明的文章

【内容】指示語の理解

【採点基準】「包装材」「および」「これらの食品包装材」は許容

【分野】説明的文章

【内容】筆者のものの見方・考え方の理解と表現

【採点基準】空欄直前の「まず（わたしたちに）できることは」を受けて、「自分たちがごみを減らす努力をする」という内容が、空欄の前後の文章につながる形で書かれているものが正解。

前後の文章につながる形で書かれていないものは準正解。

資料・調査票(到達度テスト・中学2年生国語)

5 左のグラフ⑧は一九八七年から一九九七年までの全国のごみの総量と一人当たりのごみの量の変化を示しています。このグラフから読みとれる内容として正しいものをア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア ごみの総量は、毎年わずかながら増加する傾向にある。

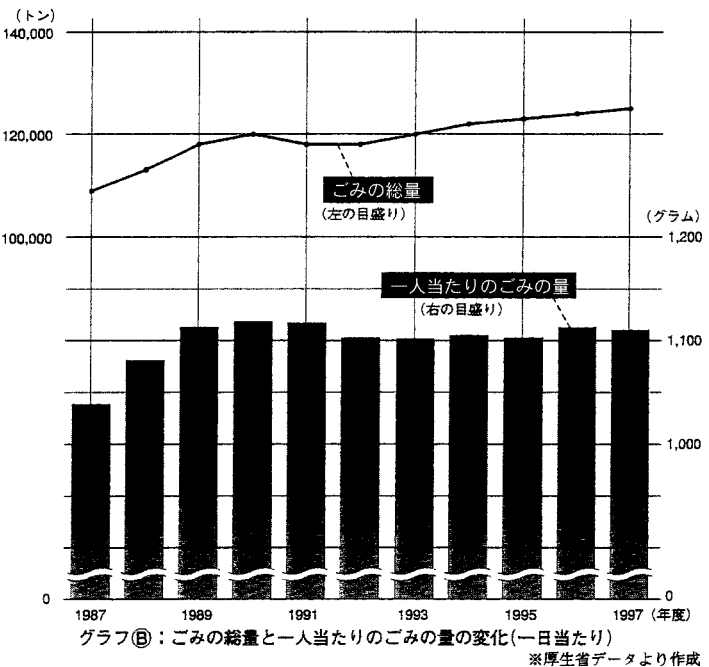
イ 一人当たりのごみの量は、一九九四年までほぼ横ばいであるが、それ以降減少し続けている。

ウ ごみの総量と一人当たりのごみの量は、反比例している。

エ 一人当たりのごみの量は、一九八七年から一九八九年にかけて増えているが、それ以降はほぼ横ばいである。

オ ごみの総量は、一人当たりのごみの量が減れば、確実に減少する傾向にある。

カ ごみの総量は、一九九〇年から一九九二年にかけて、急激に増加している。



3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その年の夏休みには、町の子どものあいだで、もちの木の皮から、とりもちを作ることがはやった。だれがどこでおぼえてきたものか、もちの木の皮をしばらく水にさらし、すりつぶしながら、かすを洗い流していくと、上等のとりもちができる。

近所の家の庭に、五本ばかりもちの木があつて、皮はそこからとった。ところが、おおせいがよってたかつて、その庭をねらったものだから、たちまち見つかつて、ぼくたちは大目玉をくつた。

「平気だよ。峠の向うつにけば、きっとあるぞ。」

【分野】 説明的文章
【内容】 グラフによる情報の理解と選択肢の読み取り
【採点基準】 ア、エそれぞれ別に採点。

資料・調査縣（劉進叔）入丁・中第2年生國語

大目玉のあとで、年うえのがき大將は、したをだして、自信たつぷりにそういった。みんなもそう思った。峠の向うには、町にはないものがあるでもあった。もちの木だつて、あるにちがない。ぼくもやはりそう考えたのだ。

峠というのは町のはずれにあった。うら通りからつく細い道が、町のつしろの丘にぶつかつて、ゆきどまりのように見える。それでもかまわずに丘のふもとまでいくと、左におれて、きゆうな石段があった。それをのぼりつめると、やっとひとりが通れるくらい、せまい切り通しの道になる。

ここが峠だ。ぼくたちはそうよんでいた。このうす暗いトンネルのような切り通しをぬけると、③ 明るい村のけしきが目の下にひろがつてくる。いままでの町の感じが、いきなり村のけしきにかわるのだ。どういうわけか、風のふきぐあいまでぎやくになつてしまふ。

ここは町から村へぬける近道だつた。しかし自転車も荷車も通れないから、この道を使う人はめつたにない。いちばん使うのは、ぼくたち子どもだつたかもしれない。

ぼくたちは、ここを通つてよく峠の向こうへ遊びにいった。そこには、小さな流れや、迷路のような細道があり、いろいろなえものがあつた。春はさくらんぼ、夏は木いちご、秋になると、くりの実やあけびがとれる。やまいもをほるのもおもしろかつた。小川のふなやどじょうを追いまわすのもちろん、夏休みの宿題のこん虫採集もここでする。学校で使う竹細工の材料もここであわせる。

だから、もちの木も、ここへいけば、きつとあるだろうと、みんなが考えた。

「だいぶ遠くまでいかなくちやいけないぞ。」

がき大將はそういった。ぼくたちはうなずいた。峠の向こうはおくが深いのだ。近くでは、農家の目が光っているから、いままでも、ろくなえものはなかつた。そればかりか、うっかり畑にはいつたりすると、とられることもあるのだ。

こんどは、かなりおくの、山の中までいかななくてはならなだらうと思つた。

ぼくたちは、みんなでもちの木をさがした。皮をはいても、しられないようなところにあるのを見つけるのは、なかなかたいへんだつた。④ さがしあてたのは、峠から三十分もはいつた山の中で、さいわいそれはかなりふとい木だつた。

しかし、がき大將は、その木の前で、ぼくたちになつた。

「この木はおれの木だぞ。だまつてとつたらしょうちしない。そのかわり、すこしずつわけてやる。」

それはやむをえないことだつたが、ぼくたちはがっかりした。三年生のちびのぼくには、ほんのおなさに、わけてくれるだけだ。ぼくはいつも指の先でひねるくらいのとちもちで、がまんしなければならなかつた。

ぼくは、思いきつて、もちの木を自分ひとりでさがそうと考えた。しかしあんなにみんなでさがしたのに、一本きりなかつたのだから、かんとんにさがせるとは思えなかつた。それに、ひとりでは、あんまり遠くまでいく元氣もなかつた。

ぼくは、とりあえず、みんながばかにしている峠の近くを、あたつてみるつもりになつた。このあたりを峠山といつていたが、だれもさがしてみなかつたところだ。

暗い切り通しの道に立ちどまり、せみの声をききながら、ぼくは右がわによじのぼろつが、それとも左がわによつが、と、しばらくまよつた。そしてのぼりにくい左がわの山にきめて、もぐりこんでいった。

顔にはねかえるささや小えだをよけて、もちの木の葉の色をさがした。しばらく進むと、足も

とがきゅうに落ちこんでいて、ぼくはがけの上に出た。向かいにも山があったし、草が深くて先が見えなかった。ぼくはあやうくころげ落ちもころだった。

⑤ きもをひやして、木につかまった。そのままのそきこむと、かなり高そうだった。ぼくは左に大まわりした。

がけをまわっておると、大きな杉林^{すぎばやし}にはいった。杉林の中は ⑥ していた。もちの木は見つかりそうもなかった。ぼくは、さっきのがけの下へいってみようと思い、杉林をつきついていった。正面にはがけの上からも見えた、とがった小山があった。つきあたりのやぶをむりやりおしわけて、小山にのぼりはじめた。

いくらものぼらないうちに、ぼくは、その小山がかくしていた、きみょうな三角の平地にひょっこりと顔をだした。

……………（中略）……………

やがて平地をまっすぐに横ぎり、三角のいちばんとがった先へいつてみた。木のあいだをぐぐりぬけてみると、目の下に小川の流れがあった。足もとから流れの中に、大きな岩が、石段のようにかさなって出ていた。向こう岸は深い竹やぶで、そのあいだを小川は大きくまがっていく。ぼくは、木につかまりながら、段々岩の下までおりてみた。水の流れっていくほうをのぞいてみると、かすかに明るく見える。

そのとき、ふとぼくは、この岩に見おぼえがあるような気がした。

- A なんだ。こんな近くだったのか。
B いつかここへきたことがあるぞ。いつだっけ。
C どこまでも、どこまでも、川をさかのぼっていたときだ。
D そうだ。みんなで、川の中を歩いていったときだった。

ぼくは、段々岩の上に立って、あたりを見まわした。いま三角平地から出てきたところには、一本の木がならんで立っていた。その木のあいだが黒くあなのように見えるが、そこが三角平地の出入口だった。

「あつ。」

と、ぼくは、声をあげた。その木は二本とも、もちの木だった。

ぼくは、声をだしてわらった。こんなところにあった！

⑦ 「この山はぼくの山だぞ。」

ぼくは思わずそついった。とくいでたまらなかった。

（佐藤さとし「だれも知らない小さな国」より）

★注 とりもち 小鳥や虫をとるために棒の先に塗^ぬって使うねばねばした物。

1 文章中の「大目玉をくった」の意味として最も適切なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア とくもびっくりしてしまった。

① ひでくしかられてしまった。

ウ とくへつ大目にみてもらった。

エ 大きな目でにらまれてしまった。

【分野】文学的文章
【内容】慣用句の意味

資料・調査票（到達度テスト・中学2年生国語）

2 文章中の「峠の回り」^②とは、町の子たちもたずねてたついでとるだと思いますが、最も適切なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア 町にはないものが何でも安く手に入る、便利な場所。

イ 一人で遊ぶには危険で恐ろしい、近寄りがたい未知の世界。

ウ 農家の人に見つからないようにひくひくして遊ばなければならぬきつぱつな場所。

エ 自然が豊かで、季節ごとにわくわくする楽しみがある場所。

3 文章中の③④⑤⑥に当てはまる言葉として最も適切な組み合わせをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア のんびりと きつと さわさわと

イ さっぱりと まもなく むんむんと

ウ すっきりと はっきり きりきりと

エ ぼかりと やつと しいと

4 文章中の「きもをひやして」^⑤の意味として最も適切なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア 苦しい思いをして

イ とくちおどろいて

ウ いらいらして

エ ぼつとして

5 文章中の⑦の部分には、「はく」が心の中で考えたことが入っています。ア～Dを正しく並べかえることのような順番になりますか。最も適切なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】ア B→C→A→D

イ B→D→C→A

ウ D→A→C→B

エ D→C→B→A

6 文章中の「この山ははくの山だぞ」^⑦と言ったときのはくの気持ちはどのようなものだったと思いますか。はくの気持ちとそのような気持ちをもった理由を三十字以内で書きなさい。

【解答例】自分だけでもちの木を見つけることができて、とくにになった。【二十九字】

【分野】文学的文章

【内容】文脈の読み取り

【分野】文学的文章

【内容】語句の用法

【分野】文学的文章

【内容】慣用句の意味

【分野】文学的文章

【内容】心情の読み取り

【分野】文学的文章

【内容】心情の読み取りと表現

【採点基準】「はくの気持ち」「および」「そのような気持ちをもった理由」について、素材の内容から逸脱しないで書いてあれば正解。正解となる内容の中心は、「もちの木を一人で発見したこと喜び」にある。「気持ちのみあるいは「理由」のみの記述は不正解。

4 次の各問いに答えなさい。

1 次の①～③の——線部の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

① この分野では彼^{かれ}に匹敵する力がある。

【正解】 ひつてき

② 飛行場の滑走路

【正解】 かっそう

③ とつぜん恐怖感に襲^{おそ}われる。

【正解】 おそ

2 次の①と②の——線部の熟語の中で、誤った使い方のものをア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】 ① ア このホールは一人人を収容できる。

イ 空きビン・空きカンを回収して、リサイクルする。

ウ 人々がさわぎ出して、収集^{しゅうしつ}がつかなくなった。

エ ことも会の会費を徴収する。

【正解】 ② ア 彼女の特技は鉄棒だ。

イ 日本語の特質について研究する。

ウ 素材の特製を生かした商品を開発する。

エ 熱帯地方には特色のある果物が多い。

3 次の①～③の文の□に当てはまることわざとして最も適切なものを、後の□のア～カの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

【正解】

① にわか雨に降られてすぶぬれになりながら自転車をこいでいたら、パンクしちゃってね。まったく□ウ だったよ。

② パーゲンで買ったシャツを洗たくしたら縮んでしまい、一回で着られなくなってしまう。□エ とはまさに□□のことだ。

③ あわてないでもっといねいにやりなさい。□カ と□□□□もあるだよ。

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| ア 骨折り損のくたびれもうけ | イ 鬼 ^{おに} に金棒 |
| ウ 泣きつ面に蜂 | エ 安物買いの銭 ^{ぜに} 失い |
| オ のど元過ぎれば熱さを忘れる | カ 急がば回れ |

問題はこれで終わります。

【分野】 言語事項

【内容】 漢字の読み

【採点基準】 ①「ひつてき」は許容。

②「かっそう」「かっそうち」「かっそうち」は許容。③「おそわれる」は許容。

は許容。

【分野】 言語事項

【内容】 熟語の意味

【分野】 言語事項

【内容】 ことわざの用法

3. 調査結果解説

1. 音声言語

国際社会、高度情報社会に対応する国語の力として求められるものは、情報の活用能力であると考えた。情報の中でも、音声言語によるそれは、生徒の生活の中で増加する一方であり、情報の質も多岐にわたっている。そういう錯綜した情報をいかに正確にとらえることができるか、多くの情報の中で必要な情報を整理することができるか、さらに自分自身がその場に応じた情報の発信者となれるか、といった一連の音声言語による情報活用能力を調査する目的で①の放送問題を設定した。

この設問では二人の生徒のやりとりを聞き分け、それぞれの主張を理解するとともに、自分自身の立場や意見を明確に持ち表現するという力をみよとしてしている。

学習指導要領の「A 表現・ウ、ケ、コ」および「B 理解・イ、ク」の事項にかかわる問題である。

①(1)の通過率は93.3%であった。選択肢による解答であり、話し手の二人のうちのどちらかを選ぶということから、迷う要素が少なかったものと考えられる。しかし、若干の誤答があった原因を考えると、太郎の発言の最初の部分「ぼくは自分たちの言葉づかいが特別に乱れているとは思いません」を十分に聞き取ることができなかったのではないかと考えられる。受験者の放送問題に対する慣れの度合いや、試験に対する緊張感等の心理的な問題も含まれるであろう。

(2)の通過率は96.3%、(3)の通過率は97.0%といずれも高い数値を示している。

(2)の誤答で「ア」と答えた生徒が多いのは、太郎の最後の発言の「そんなかた苦しいことを言うなよ」の「かた苦しい」に引きずられてしまったのではないかと考えられる。文脈としてとらえるのではなく、一単語として聞

き取っている段階といえるのではないだろうか。

単語として聞き取っているという点においては、(3)の誤答についてもいえることである。話し合いに出てきている「省略語」と「流行語」を選んだ生徒が若干名ながらいるのに対して、話し合いに出てきていない「外来語」を選んだ生徒は皆無であった。話を聞く際に断片的な単語として記憶してしまい、話の筋道をとらえながら聞き取り、話し手の考え方を理解するまでには至っていないものと考えられる。

(4)は正解率は47.7%、準正解を含む通過率は78.1%であった。全体として厳しく採点し、話し合いの場面での発言であることを考慮して、理由が明確に述べられているかどうかを重視した。以下に採点例を示す。

【正解例】

・私は、花子さんにも太郎君にも両方に賛成です。なぜかと言うと、流行語などはみんなが知っているからしたしみやすいからです。でも目上の人に向かっては時と場合によって話し方をかえるべきだと思います。

【文章が稚拙でも条件を満たしていれば正解】

・私は、流行語はいいと思う。「おっはー」とかべつにいいと思う。上の学年にはちゃんと、敬語をつかったらいいと思う。「おっはー」とか、気がるに、話をしてくれると、うれしいから。

【どちらの立場が明示していなくても理由・根拠からそれが推測できれば準正解】

・私はより仲良くなれるのならいいと思います。だけど、目上の人には敬語を使った方がしつれいにならないからいいと思います。

・自分も、年下の人から「オッハー」と言われると、調子にのるなと思うから。

【言葉づかいというテーマに言及していないものは不可】

・そういう話し合いをしても意味がまったくありません。なぜなら、あなたがたが話し合ってもなにも変わらないからです。もっと他のことを話し合った方が、いいと思います。しかし、意味のある話し合いですね。

【立場のみで、その理由を説明していないものは不可】

・目上の人と同じ年の人、下の年の人というふうに、自分で分けて言葉を使えばいいと思う。

・目上の人なら敬語を使った方がいいと思う。友だちなら省略語でもよいと思う。

以上は、わずかな採点例であるが、全体としては、次のようなことがいえる。

①予想していたよりも全くの「空欄」の生徒が少なく、「書くこと」の学習活動が定着してきているものと考えられる。

②最初に立場（賛成・反対・どちらでもない等）を明確に述べている生徒が多く、意見文の書き方や、話し合い活動における立場の示し方等が定着してきているものと考えられる。

③しかし、理由や根拠の述べ方が弱く、相手を説得するための、書き方や話し方の習得をより一層図るべきであると考えられる。

④「から」「ので」といった理由や根拠を示すことばを使っているが、明確な理由や根拠になっていない例も多く、「から」「ので」に頼ってしまっている傾向もみられる。

●指導のポイント

音声言語の指導については、新しい学習指導要領においては、より一層重視する方向性が示されている。

「改善の具体的事項」の中でも、『『話すこと・聞くこと』の領域では、目的や方向に沿って効果的に話したり、相手の意図を理解しながら聞いたりする能力の育成を重視する』としている。

今後は日常の授業の中で漠然と話させること、聞かせることなく、目的や場面に応じた話し方、聞き方の学習活動を多く取り入

れていくことが必要になってくるだろう。

また、情報の発信という点においては、話すことと同様に目的や場面に応じた書くことの学習活動も一層重視されていく必要がある。

2. 説明的文章

前述したように、国語の力を情報の活用能力ととらえると、説明的文章の理解はまさに情報の収集・整理・取捨選択・発信といった流れの中に位置づけることができる。

国語科で学習する説明的文章の内容、テーマは多岐にわたっており、現代社会における今日的な課題に関するものも少なくない。特に「環境」に関するものが多く、それだけ生徒にとっては身近なテーマといえるであろう。②の説明的文章は、その「環境」について、生徒にとってもっとも身近な「ごみ」の問題から視点をあてている。

また、この文章ではデータとしてグラフも示してある。これは、文章による情報とともに図表を読み取る力も情報の活用能力として不可欠のものにとらえているからである。

学習指導要領では、「A 表現・オ」「B 理解・ア、イ、ウ」および「言語事項・オ」にかかわる問題である。

②(1)の通過率は48.9%であった。グラフの一目盛りが二千トンであるのに、読み間違えと思われる誤答が多い。「十一万」「十万千」といった誤答がもっとも多く、それぞれ約2割弱の生徒が答えている。

(2)の正解率は30.9～81.3%で、準正解を含めた通過率は64.7～92.5%であった。各段落の書き出しの表現、「まず第一に言えるのは」「次に」「最後にもう一つ」を手がかりにすると、比較的容易に正解にたどりつけたのではないだろうか。

採点のポイントとしては、「廃棄物の中身」およびそれが「どのように変化」したのかについて書かれていることが必要である。準正解としたものは、「変化」について述べず、たとえば「使い捨ての容器、包装材」「食べ

残し」といった「廃棄物の中身」についてのみ書いているものや、整理されていないが、正解の内容が含まれているものについてである。

この設問から言えることは、何について答えればよいかかわかっていても、要約して整理する力が不十分であるために、適切な解答となっていない例が多いということである。

(3)は指示語の理解を問う問題である。「それ」という代名詞ではなく、「その」という連体詞を設問としたために、やや難易度が上がった感がある。通過率は64.0%であった。誤答としては、「ビニル、ポリエチレンなどのプラスチック」がすべての誤答のうちの2割弱である。また、単語で答えず、「これらの食品包装材はますます増加する傾向にあるが」などのように、文章の一部をそのまま抜き出している例もあった。「空欄」も約1割と多く、全体として、指示語の機能についての理解がやや不十分ではないかと考えられる。指示語の問題は前後の文章をよく読むこと、あてはめてみて文意が変わってしまったり、文の組み立てに不備が生じたりしないかなどに注意させることが必要である。

(4)は、本文のテーマを理解した上で、「まず(わたしたちに)できることは、」を受けて、「自分たちがごみを減らす努力をする」という内容が、文の呼応の関係をふまえて書かれていることが必要である。

以下に解答例をあげる。

【正解例】

- ・自分自身がごみを減らす努力をすることである。
- ・本当に必要なものだけを買ひ、無駄にものを買わないことである。

【準正解例(前後の文章につながる形で書かれていないものは、内容面で誤りがなくとも準正解)】

- ・リサイクルや本当に必要なものかどうかをみたりすること。
- ・物のつかいすてをやめてリサイクルにはげみましょう。

- ・物を大切に使ったり、リサイクルしてもう一回つかうことができる。

【本文からの抜き出しは不正解】

- ・ものを作ったり、買ったりするときによく考えることである。
- ・つねに買った後、使った後にその品物の行く末を考えることである。

【単語のみは不正解】

- ・リサイクル

【文意が伝わらないもの、説明不足のものは不正解】

- ・消費者の私たちの一人一人がそのことを考え、生活することだろう。
- ・まずその食材が自分に合っているかどうかを考える。
- ・かんきょう問題をなくし、ほんとうにいい物をたしかめる。
- ・土にうめて腐るプラスチックか、リサイクルできる。
- ・お金のむだ使いをしないことができる。

この設問の正解率は22.7%であった。準正解を含めた通過率でも68.0%とやや低い数値となっている。筆者のものの見方・考え方を理解する力がやや不十分であると同時に、前後の文とのつながりを考えて表現する力が不足しているものと考えられる。「書く力」は常に長い文章を書くことばかりではなく、短く適切に表現する力もつけていく必要がある。

(5)はグラフからの読み取りの問題である。正解のうち「ア」を選んだ生徒は62.3%、「エ」を選んだ生徒は68.9%であった。折れ線グラフと棒グラフの示しているそれぞれの内容を取り違えた誤答や、選択肢の表現を十分に読み取れないで誤った例がある。また、選択肢「オ」を選択した生徒が多いのは、グラフを見ないで選択肢の内容「ごみの総量は、一人当たりのごみの量が減れば、確実に減少する傾向にある」によって判断してしまったためと考えられる。

●指導のポイント

説明的文章の理解については、まず筆者の

ものの見方・考え方をとらえる上でキーワードをとらえさせる必要がある。また、指示語や段落の書き出しの部分に注意して読むなどの方法も学習させていく必要がある。

(岩間和子 神奈川県横浜市立小田中学校教諭)

3. 文学的文章

●出題のねらい

自分が直接経験しなくても、文学的文章の読み取りを通して物事を豊かに想像し、世界を広げていける可能性がある。この設問では、登場人物の言葉や生き方などから書き手のものの見方や考え方を理解し、共感していくことができるかどうかをみようとしている。

学習指導要領の「B 理解(1)ウ、エ、オ、カ、キ」「A 表現(1)オ」および「言語事項」(1)イ、ウにかかわる問題である。

●正答・誤答の分析

③(1)は慣用句の意味を問う問題である。通過率は80.2%と高かった。誤答の7割は「ア」である。悪いことをして見つけたという文脈から、「びっくりした」意と解釈したものと考えられる。

(2)は文脈を読み取る問題である。通過率は64.1%であった。4つの選択肢のうち、「イ」「ウ」は「峠の向こう」のイメージを「危険で恐ろしい」「近寄りがない」「(イ)や「びくびく」「きゅうくつ」(ウ)などと否定的にとらえたものであり、誤りと判断できよう。残る「ア」「エ」はいずれも肯定的にとらえた選択肢である。経験などをもとに想像することができれば、「エ」の「わくわくする楽しみ」を選べるだろう。誤答の7割強を占める「ア」を選んだ生徒は、文章中の「学校で使う竹細工の材料もここでまにあわせる」という表現によって「何でも安く手に入る、便利な場所」と考えたのであろうか。とすれば、かなり表層的な読み取りと言える。

(3)は空欄に適切な副詞を補充する問題である。通過率は83.1%と高かった。選択肢が語の組み合わせだったことで平易な問題になっ

たとえられる。特に④では、空欄の直前の「たいへんだった」という表現から正答の「やっと」を導き出すことは容易であろう。

(4)は(1)と同じく慣用句の意味を問う問題である。通過率は59.3%と(1)に比べて20ポイントも低かった。「きも」という語になじみが薄いものと考えられる。現代の子どもたちに「きもだめし」の経験はあるのだろうか。誤答としては「ア」が5割強、「エ」が3割である。「ア」の「苦しい思い」は文脈から想像しうるとしても、「エ」は正反対の意味である。「木につかまってほっとした」と勘違いしたのだろうか。

(5)は心情の読み取りである。通過率は72.3%と比較的良好だった。文章中に明確な手がかりがあるからであろう。直前に「見おぼえがあるような気がした」とあるから、昔の記憶をたどるような文(B)が続き、Bで「いつだっけ」とつぶやいているので、「いつ」に相当する文(D)が続く、という具合である。文脈に即して展開を追いつながり読み進めていく指導が必要であろう。

(6)も同じく心情の読み取りの問題である。通過率は30.8%と低かったが、的外れな答えや全くの「空欄」はわずかであった。誤答のほとんどは、必要な2つの要素(「ぼく」の気持ちと、そのような気持ちをもった理由)のうち一方しか書いていない答案であった。問題文をよく読み、指示されたとおりの書き方をするよう指導していく必要がある。

●指導のポイント

生徒の個人的な経験にはかなりの幅がある。進んで読書に親しむ態度を育てていく指導が必要である。

4. 言語事項

●出題のねらい

言語に関する知識は、国語のすべての学習にかかわる基礎的な事項であり、学習で得た知識を実際の言語生活に適切に生かすことのできる能力を育てる必要がある。学校での学

習はもちろんだが、生徒の置かれた言語環境、つまり、幼少期から家族など身近にいる大人が使用するのを耳にしてきたかどうか、生徒の知識量や能力に大きく影響していると考えられる。

現代の情報化社会を生きる生徒にとって、コンピュータを用いて文章を書く機会は今後ますます増えていくことだろう。したがって、この設問では、漢字の読みや同音異義語に関する問いを中心に出题している。

学習指導要領では〔言語事項〕(1)イ、ウ、(2)アの指導事項にかかわる問題である。

●正答・誤答の分析

④(1)は漢字の読みを問う問題である。

①の通過率は70.6%であった。「匹」は、助数詞としてなじみが深いので「ひきてき」という誤答を予想したが、実際に誤答として目立ったのは「してき」であった。

②の通過率は64.1%と、3問中もっとも低かった。「飛行場の。○路」という前後関係から、正解を十分に類推できるであろうと考えていたが、「こっそう」という誤答が多かった。「滑」のつくりの「骨」の音読み「コツ」からの連想と考えられる。

③の通過率は95.6%と、高い数値を示した。テレビゲーム等の影響であろうか、現代の中学生にとってはきわめて平易だったようである。

(2)は、類義語の意味の違いを正しく理解しているかどうかを問う問題である。通過率は①が34.8%、②が23.0%と、ともにかなり低い結果となった。誤用と判断することが中学1年生修了段階では難しかったのか。それとも、問題文を読み誤って正しい使い方のものを選んでしまったのか。判断しかねるところである。

①の「ウ」は正しくは「収拾」だが、「収拾がつかない」という表現自体が難解だったものと考えられる。「収集」は「ごみの収集」などと使われるので、「収集がつかない」を

集まらずにバラバラになる意と解釈し、正解と判断したのかもしれない。誤答の6割は「エ」であった。「徴集」という語が実際にあるため、会費を集める場合にはこれを用いると考え、「徴収」を誤用と判断した可能性がある。

②では「イ」という誤答が7割弱に上った。「特質」という語にあまりなじみがないため、これを誤りと考えたのだろうか。「ウ」は正しくは「特性」だが、これもやや難しい語であった。「特製」は「特製ジュース」などとよく使うので、誤用と判断しなかったものと考えられる。

(3)は、ことわざの用法を問う問題である。

①の通過率は56.0%であった。「にわか雨」と「パンク」という、2つの悪いことが重なっていると読み取れるかどうかのポイントである。誤答の7割を占める「ア」を選択した生徒は、一生懸命に自転車をこいでいたのにパンクしてしまったことを「骨折り損」と解釈したものと考えられる。

②の通過率は89.3%であった。問題文を読めばそのものズバリの、基本的な問いである。

③の通過率は73.2%であった。「あわてない」という表現から「急ぐ」を連想できるはずだが、「急がば」という表現が文語調で意味が取りにくかったものと考えられる。

●指導のポイント

漢字の学習については、取り立てて指導することも大切だが、文脈の中に位置づけて学習することが望ましい。同時に、辞書を手元に置き必要に応じて活用する習慣を身につけさせる指導が有効である。また、語句については、類義語の意味の違いや同音異義語の用法などに注意を向けさせ、文脈の中で適切に使える力を養う指導が必要である。ことわざや慣用句の学習においては、伝統的な言い回しを理解させるとともに、生きた表現として実際に使えるよう指導していく必要がある。

(五味貴久子 筑波大学附属中学校教諭)

4 . コメント

[1]

尾木 和英 (東京女子体育大学教授)

最初に通過率に関する全体的な状況をみたと、次に内容領域ごとに、検討が必要であると思われるもの、問題ありと考えられるものを中心に考察を加えることとする。

1 . 通過率の概要

本調査の通過率を全体的にみると、80%を超える数値を示したものが8設問、60～70%台が12設問、60%に達しないものが6設問となっている。

この結果は、設問の内容や出題の仕方とも関係するので一概に判断を下すことは難しいが、通過率が50%に達しないものについては、1つの問題提起として受け止める必要があろう。特に20～30%にとどまっているものについては、そこで提出されている問題について考える必要がある。

内容領域別に通過率をみると、同じ領域の中でも設問によってばらつきのあることが認められる。調査結果の検討・活用の際には、内容領域全体としての把握と同時に、設問の内容に即して、学習状況にどのような傾向が認められるか、どのような問題が提出されているか、検討を加えることが求められる。

2 . 音声言語に関して

①(1)(2)(3)の「聞き取り」に関しては、それぞれ93.3%、96.3%、97.0%の通過率を示している。

聞き取る内容としては関連しており、また表現のされ方も屈折なく明解であることが高い通過率に結びついたものと思われるが、話の内容を聞き取る基礎的な力はついていると

考えてよからう。

これに対して、①(4)の自分の意見の整理は、通過率では78.1%だが、正解率は47.7%にとどまっている。

この設問に関しては、聞き取ったことをもとにしてという点では音声言語に属すが、百字以内で書くということで、書くことに関する力もかかっている。①聞き取った内容の整理、②自分の意見のまとめ、③字数制限の中での表現という3つの条件のクリアが求められているので、高い正解率、あるいはこの領域の他の設問と同程度の高い通過率が得られなかったものと考えられる。

そうした条件があるにしても、この設問に関して、聞き取ったことをもとに、自分の意見を整理して表現することについては、十分とは言えない面があるといえよう。

3 . 説明的文章の読み

②(1)は、文章の読みに基づくグラフ情報の読み取りを内容とする設問である。通過率が48.9%にとどまっていることから、説明的な文章に関連するグラフ情報の読みの力は、十分とはいえないと判断される。

この設問の答えを得るためには、2つの条件をクリアしなくてはならない。1つは、本文の読みによって設問の意味を理解することである。もう1つは、グラフを構成する単位の数字の意味と、一刻みの目盛りが何トンになっており、該当年度のトン数がどれだけであるかを正確に読み取ることである。これからの情報社会においては、このように文章、図表、グラフなどを組み合わせた形で情報が提出されることが多くなるだけに、この設問

が要求するような力を育てるための学習指導の工夫が重要になる。

②(4)は、文脈を考えた上で自分にできることについて表現する設問である。

通過率68.0%に対して正解率が22.7%となっているのは、この設問が、①本文の意味を理解すること、②文脈から考えて空欄の部分にあてはまる内容を考えること、③「まずできることは、」という書き出しにつながるように適切に表現することの3つの条件を要求しているからである。ここで要求されているような力を育てるために、どのように学習指導の工夫をするかが課題として提出されている。

4. 文学的文章の読み

通過率60%に達していないのは、③(4)と(6)である。

③(4)は慣用句の意味を問う設問であるが、通過率は59.3%となっている。一般的に慣用句の理解は、その慣用句に接する機会と関連するところが大きい。もしその機会が乏しいのであれば、例えば語彙指導によって「きもを潰す」「きもが据わる」「きもをぬかす」といった語とともに意図的に扱うような指導の工夫が意味を持つことになる。

通過率30.8%という低い数値にとどまっているのは、心情の読みを内容とする③(6)の設問である。

通過率が低くなった理由としては、単純な心情の把握ではなく、①心情の把握、②その理由の理解、③30字以内での表現という3つの条件を含む形で出題されていることがあげられる。

こうした力を育てるためには、文脈を正し

くとらえて読む、理由や根拠を把握して読むといった学習指導について工夫を凝らすことが重要である。

5. 言語事項について

④(1)①②③は漢字の読みである。通過率は、それぞれ70.6%、64.1%、95.6%となっており、大きな問題は見いだされない。しかし、漢字を読むことは、文字情報理解の基礎に位置するだけに、さらに確かな定着が得られるよう、学習指導上の工夫が求められる。

問題があると思われるのは熟語の意味にかかわる設問であって、④(2)①②の2問の通過率は、それぞれ34.8%、23.0%にとどまっている。

熟語の使用の力に関しては、一般的に、その熟語に触れる機会の多少によって左右される。特に本設問に出題されている語には同音異義語があるので、そのことも留意した指導の工夫が求められる。語彙指導の形で取り出して指導するということも考えられるが、文脈の中での理解という点からは、教室以外の場での読書機会も視野に入れ、多様な読みの機会が設定されるよう配慮したい。

④(3)①は、ことわざの用法に関する設問であるが、通過率は56.0%となっている。他の2問も同様の内容の設問であるが、89.3%、73.2%という通過率になっている。これは、①の設問で問うことわざが、最近の生徒には比較的なじみの薄いものになっていること、他の2語に比べて、やや意味のとりにくい面を持っていることなどが考えられる。慣用句やことわざに関しては、生徒の学習機会を設定するための工夫が大きな課題となっている。

[2]

大熊 徹 (東京学芸大学教授)

1. 調査問題と採点基準について

調査問題の難易度は、中学校2年生を対象とする問いとしては標準的であり、正解や許容範囲を示す採点基準も多方面からの配慮が行き届いている。

ただし国語科では、記述式の解答に関する採点基準が殊の外難しい。たとえば、②(4)の採点基準などである。この小問は、「正解」と「準正解」とを設定しているので、通過率は高くなっている。しかし、③(6)は「正解」だけなので、通過率は低い。「準正解」を設定することもできるのではないかと考えられるところである。

2. 通過率からみる全体的傾向

全般的に通過率の高い領域は音声言語(①)領域である。各小問ごとの通過率も、93.3%、96.3%、97.0%、78.1%であり、他と比較するとかなり高いことがわかる。

通過率だけをみれば、説明的文章の読み(②)の領域と文学的文章の読み(③)の領域は、それぞれ1つの小問が、48.9%、30.8%と低いだけで他の小問は多少のバラツキはあるがまずまずである。

言語事項(④)の領域も、(2)(熟語の意味)以外はやはり多少のバラツキはあるものの、まずまずの通過率である。

以下、領域ごとに調査結果をもとに指導のポイントを考えてみよう。

3. 音声言語領域の指導のポイント

①は、話を聞く力と聞いたことをもとにして考えたことを書く力を問う問題である。小学校、中学校、高等学校の新学習指導要領の

国語科の教科目標に「伝え合う力」という文言が加えられたことからわかる通り、これからの国語教育においては、話をしたり、聞いたり、話し合ったりする力、つまりコミュニケーション能力の育成がきわめて大事なもののとなる。

とりわけ、これからは聞く力が大事になる。遠藤栄(放送大学客員教授)によれば、アメリカの大学のテキストには「聞き手がコミュニケーションの責任の51%を負う」と述べられているそうである。聞き手をいかに育てるかが指導のポイントである。

ところで、①の通過率がかなり高いことを先に述べたが、この結果に安心することなく、話したり、聞いたり、話し合ったりする力、コミュニケーション能力の育成に一層の重点を置いて指導すべきであろう。

なぜならば、(4)の通過率は78.1%ではあるが、それは準正解を加えた数であって、正解率は47.7%しかない。準正解の30.4%を正解に導くための指導を怠ってはならない。

4. 説明的文章の読みの指導のポイント

第15期中教審の第1次答申(1996年7月)には、初等中等教育で育成を重視する資質・能力の1つとして「論理的思考力や科学的思考力を育てること」とある。また教課審の答申(1998年7月)には、読むことの領域の具体的事項として「目的や意図に応じて、要点や要旨などを読み取る能力」の育成を重視することが示されている。説明的文章の読み(②)がこれらにかかわる問題である。

ところで、②であるが、これが国語の問題なのかという疑問を持つかもしれない。とりわけ、(1)と(5)は数学のグラフを読み取る問いではないかと疑問を持つことは十分考えられるところである。

そこで、設問をよく検討してみよう。

(1)を解くには単にグラフを読み取るだけではなく、叙述の細部までをも正確に読むことが必要なのである。なぜならば、本文中の「四万五千トン」「八万七千トン」とうように千トン単位なのである。このことを読み取らないと正確には答えられないのである。

また、数学的に正確にグラフを読み取っていても、それをいかに表現するかという段階になると国語の表現力がものをいうのである。

さらに、これからは、総合的な学習の時間の調べ学習として、百科事典・新聞・地図・理科年表・統計記録などあらゆる資料を読む必要に迫られてくる。いわゆる文字中心の書籍を読むという「読み」の概念から資料類を含めた幅広いものの「読み」へと発想の転換をすることが必要なのである。

さて、正解率の一番低い小問は(4)であり、22.7%である(ただし、準正解が45.3%あるために通過率は68.0%)。この問いは、筆者の要旨を踏まえて、その要旨と同じ主旨のことを書かなければならないから高度である。

指導のポイントとしては、まず要旨をとらえさせる。そして、要旨の延長線上に位置づく具体的な内容を考えさせることである。また、「まずできることは、」という書き出しにつながるように書くこともおさえたい。

(2)は、「次に」「最後にもう1つ」という叙述の要点を示す言葉に着目させることが指導のポイントである。また(3)は、文章中の表現をそのまま使って答えることである。しかも、短くて適切な言葉をとらえさせることが、指導のポイントといえよう。

5. 文学的文章の読みの指導のポイント

登場人物の心情や場面の情景を豊かに想像して読む力、さらに、読んだことをもとにして、豊かに想像したことを文学的に書く力を問う問題である。

先に紹介した教課審の答申(1998年7月)では、従来の国語科の指導の在り方を「文学的な文章の詳細な読解にかたよりがちであった」と指摘し、その指導の在り方を改めるように指示している。

しかし、③の通過率をみる限りにおいては、(6)を除けば他の小問の通過率が高い。これまでの国語科の指導によって子どもたちに文学的な文章を読む力が育ってきたことを示しているといえよう。

やはり、教課審の答申(1998年7月)が指摘しているような「読書に親しむ態度を育てる」ことが指導のポイントとなろう。

なお、(6)だが、冒頭にも述べたように、「準正解」を設定することもできるのではないかと考えられる。記述式の問いなのであるからそのほうがより適切な調査結果が得られたかもしれない。もちろんそうすれば、通過率が高くなることはいうまでもない。

6. 言語事項の指導のポイント

言語事項の各小問を比較すると、④②①②の通過率が際だって低い。

紛らわしい熟語を使い分ける力は、作文を書く際に必要となる。同音異義語、同訓異字等とともに指導することが大事である。